

孫が生まれる時

——視覚に障がいのある妊産婦の実母の事例——

平 田 恭 子*

I. はじめに

視覚に障がいのある女性自身の妊娠期から育児期にかけての研究は乏しく、医療者がケアに当たる際のケア計画やその実施状況に関して（小野、1992；福田他、1994）、妊娠や出産による身体症状や育児をする上での工夫など医療者や介助者の視点での報告はされている。

一方で、視覚に障がいのある女性が半生を綴った手記は何冊も出版され、自身の妊娠、出産や育児の経験が書かれている。例えば、「視覚障がいは遺伝するかもしれないから堕ろした方がいいねと医師に言われた」（立道、2007、p.96）、「もろもろの質問すべてが付き添ってきた母に対してなげかけられる」「子ども扱いされることが、悔しかった」（安田、2002、p.19、p.20）と差別的な言葉を投げかけられた女性の体験がある。その他に、視覚に障がいのある母親らが自身の妊娠期から育児期にかけて体験や工夫などをまとめた子育てハンドブックも出版され（国際視覚障害者援護協会、2009）、当事者が周囲から受けた差別的な体験とともに自身で行っている授乳や、子どもに離乳食を食べさせる際の工夫をうかがうことができる。

その他、障がいに関わる妊娠期から育児期における研究は、障がい児を産んだ非障がい者の母親に焦点を当てたものが非常に多い。それらは主に障がいのある子どもを産んだ、または子どもに障がいがあることが分かったことにショックを受け、子どもの障がいを受容するまでの過程がどのようなものかに関してである。子どもの年齢別に概観すると子どもが乳幼児期にある母親に関しては最も多く、障がい受容に関して（小池他、2004；谷川他、2008）や育児を行う上でどのような体験をしているか（宮崎、2002；一瀬、2005）などがある。乳幼児期の前段階である新生児期においては、障がい受容に関して（半田、1999）、子育て困難感に関して（梶、2017）があるが、子どもが学童期と青年期においては格段に少ない。その他、子どもの年齢を問わず幅広く実母のメンタルヘルスとそのサポートに関して（種子田他、2004；松岡他、2002）や、母親になっていく過程の中での思いに関して（園川、2015；大久保、2016）は明らかにされている。しかし、成人期にある障がい者の母親の思いや体験に関する研究はない。

実母は、女性自身（娘）が妊娠期から育児期という母親になる時期において強力なサポーターとなり得る。また、日本には「里帰り出産」という文化があり、産後も実母のもとで養生し、直接育児技術の伝承を受けるなど、実母から多くのサポートを得ることになる。子育てには親自身が受けた育児体験が大きく影響するとも言われている（松岡、2006）。また、育児期にある娘にとっては実母の支持的かつ受容的サポートは娘の育児ストレスを軽減させ、逆に実母の支配的な関わりは母娘関係の緊張状態を引き起こし、娘の児に対する愛着障害のリスクを生み出すことが明らかになっている（白井他、2006）。以上から、娘自身の母親役割取得過程においては実母の影響力は大きいと言える。一方、娘が妊娠期から育児期にある実母に関しては、娘の心身の安楽を考え、娘（夫婦）の育児を見守り、自身の育児能力を見極め娘に必要なサポートを判断するという支援姿勢をもっていたり（井関他、2013）、娘独自の育児を見出すために援助し、母親らしくなった娘を信頼し娘家族が自立するような支え方へと支援プロセスを変化

キーワード：視覚障がい、妊産婦、実母、妊娠、育児

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2018年度3年次転入学 公共領域

させている（中村、2018）ことも明らかになっている。これらの姿勢はまさに娘が母親になる上での促進因子となっていると言える。これらの娘と実母においては、非障がい者であることが前提となって研究がされている。

障がいのある女性の場合はどうか。視覚に障がいのある女性においてのみ、妊娠期から育児期にかけての実母とどのような関わりをしていたのかが明らかにされ、妊娠や出産を実母から祝福されたり、直接的サポートを受けたり、自分の特性に合わせて工夫をしてもらう一方で、障がいがあることで「できない」と決めつけられた辛い体験もしていることが分かっている（平田他、2017）。では、その時期に実母自身はどのような体験をしているのであろうか。視覚に障がいのある女性（娘）が体験したように、実母は娘の妊娠や出産を祝福したり、娘のやり方を尊重したり、障がいがあることで娘のことを「できない」と決めつけたりしているのであろうか。この時期にある女性（娘）の側面だけでなく、実母側の体験がどのようなものかを明らかにすることは重要であると考えられる。

そこで本研究においては、視覚に障がいのある女性が妊娠期から育児期にあった際の実母がどのような体験をし、娘との関係がどのような経過を辿っているのかを明らかにすることを目的とした。

Ⅱ. 研究対象者と研究の概要

1. 研究対象者

研究対象者は、視覚に障がいのある育児期にある女性（産後10年以内）の実母とし、実母の障がいの有無は不問とした。また、育児期にある視覚に障がいのある女性の障がいの種類、程度、受障時期は不問とした。

2. データ収集方法

対象者は、まずは機縁法にて育児期にある視覚に障がいのある女性（産後10年以内）に接触をとり、研究の概要等を説明し、実母の紹介を依頼した。紹介にあたっては女性の自由意思を尊重し、圧力がかからないようにした。女性から実母を紹介された場合は、実母に研究の概要等を説明し同意を得た。実母の研究協力の可否は、娘である女性には公表しないことを約束した。同意が得られたら、半構造的インタビューを行い、自身の娘が妊娠をし、育児期（およそ産後1年以内）に至るまでどのような体験をしたのかを自由に語ってもらった。インタビューデータは同意を得てICレコーダーに録音した。

3. データ収集期間

データ収集期間は平成27年5月～平成28年1月。

4. データ収集内容

研究対象者の基本情報をはじめ、視覚に障がいのある娘が妊娠した時に感じた思い、娘とのやり取り、妊娠経過中や出産時の娘とのやり取りや感じたこと、産後1年以内の娘とのやり取りや感じたこと、その他医療者との関わりなどのデータ収集をした。

5. データ分析方法

得られたインタビューデータをすべて逐語録に起こし、繰り返し精読した。視覚に障がいのある娘の妊娠期から育児期（産後1年以内）にかけて、意味のある体験の場面を切り取りテーマをつけ、(1) 娘の妊娠が分かった時、(2) 娘の妊娠経過中から出産まで、(3) 娘の育児中の3つの時期に分けた。

6. 倫理的配慮

研究への協力は自由意志であり、本研究で得られた対象者の個人情報等を外部に漏洩しないこと、研究に参加しなくても不利益を被らないことを対象者に文書を用いて口頭で約束した。視覚に障がいのある女性への文書は、点字版、墨字版（12、16、20ポイント）、白黒反転版、テキストデータなどの準備をし、選んでもらった。

なお、本研究は、神戸市看護大学倫理委員会の承認（承認番号2014-1-28-2）を得て行った。

Ⅲ. 結果

1. 研究対象者の背景（表1参照）

研究対象者は2名である。研究対象者の背景に関しては表1を参照する。

今回、非障がい者という共通点を持ち、支持的ではあるが距離をおいた関係の母娘（A,a）の母（A）と支持的であり密接（支配的とは言えないがやや過保護）な関係の母娘（B,b）の母（B）という対照的な2事例を検討することとする。

表1 研究対象者の背景

研究対象者		子ども		孫
A氏	50代、障がいなし 夫とは離婚 一人暮らし	長女(a氏)	30代、未熟児網膜症にて全盲、夫も視覚に障がいあり	4歳
		次女	20代、障がいなし	学童期
		三女	20代、障がいなし	いない
B氏	50代、障がいなし 夫とは離婚 一人暮らし	長女(b氏)	20代、先天性の眼疾患にて全盲、夫も視覚に障がいあり	2歳、0歳
		長男	20代、障がいなし	いない

2. インタビュー結果

A氏は2016年5月、B氏は2017年1月に各1回ずつ半構造的インタビューを行った。インタビュー場所は、研究対象者の意思を尊重し、対象者が希望した自宅などで行った。

A氏、B氏それぞれに、特徴的なテーマを【 】に挙げ、(1) 娘の妊娠が分かった時、(2) 娘の妊娠経過中から出産まで、(3) 娘の育児中の体験を時期別に分けた。生データは斜体にし、重要な語りは太字と下線を付けた。()内は補足部分である。

1) A氏の結果

(1) 娘の妊娠が分かった時

【娘の妊娠に複雑な思いになる】

A氏の娘のa氏は、4歳の子どもの育児中であるが、初めての妊娠は妊娠初期の稽留流産であった。A氏は、娘が妊娠した時は嬉しかったが、娘には母親になる準備ができていない、どうやって育てていくのか（できないのではないかと感じ、流産してよかったとさえ思ったことを語った。

A氏：「妊娠したときは嬉しかったです、確かにね。だけど、流産したことによって、ああ、やっぱり、何ていうのかな、まだ娘には子どもを育てるような、そういうのがないから、赤ちゃんのほうからだめになっちゃったんだっていうふうに思い込もうと、お互いに、娘も多分そうじゃないかなとは思うんですけど、だけど、やっぱり、ああ、よかったなって言ったら悪いけど、それは思いました。（中略）本音のところを言うと、できなくてよかったなと思ったのも私のどこかにあって、やっぱり育てていく、まあ、おなかの中にいる間は手がかからなくてあれですけど、生まれてから、どうやっていくのかなって思ったら、娘には悪いけど、ああ、流産してよかったって、そのときは一瞬なりとも思いましたね。」

聞き手：「ご結婚されて、どれくらいたってからの……。」

A氏：「いや、結構長かったと思います。ずっと欲しい欲しいとは言ってたけど、だから、本人2人は楽しみにしてたみたいですけど、すごく複雑でしたね。」

聞き手：「準備がまだなっていないから流れてしまったのかなって、こう思い込まそうと思われてたその準備ってというのは、どんな意味で。」

A氏：「やっぱり育てていくのってすごい大変じゃないですか。」

a氏の妹は、a氏の出産の数年前に出産していた。妹には障がいはなく、A氏は妹が妊娠した時とa氏が妊娠した時の自分の気持ちは全然違うと語った。

聞き手：「真ん中の妹さんが妊娠されたときと、やっぱり気持ちが違ってたっていう。」

A氏：「全然違います。」

聞き手：「それは、(住んでいる場所が)離れてるからとかもありますよね。」

A氏：「それもありますよね。」

【娘が育児をできるか不安を感じる】

A氏は、娘が自身だけであれば不便なことがあっても生活できていけるが、子どもが生まれた後、娘が育児をどのようにやっていくのかできるのだろうか不安を感じていた。A氏には視覚に障がいは無く、視覚に障がいのある娘に対して、自分がどうやって育児を教えるか分からないと感じていた。

A氏：「やっぱり自分の生活だけでも不便なことって多いわけですから、自分がしんどい思いするのは多分苦にならないと思うけど、今度は相手がいることなんで、それが、どうやってやっていくのかって、私のほうが不安で。(中略)それがあの子にできるかどうかっていうの。だから、教えてあげるにも、どうやって教えていいかも、私もわからなかったんで、だから、その(流産した)時は何かちょっとほっとしたっていうか。」

(2) 娘の妊娠経過中から出産まで

【実母としての意見・経験を求められる】

a氏は実母のA氏から真面目で完璧を求めるタイプであると語られていた。a氏は、胎児のことを考え、どのように妊娠期をすごしたらいいか何を食べたらいいのかインターネットで熱心に調べていた。しかし、その中でもA氏はa氏から実母としての意見を求めてられていた。

A氏：「もうほんのちょっとしたことでも心配で、とにかく、『昨日はちょっとお腹が痛いような気がする』とか、もう毎日のように電話ありましたね。食べ物のことから、とにかく完璧にしたかったみたいでね、自分で。おなかに赤ちゃんがいるときに何を食べたらいいとか、何を飲めばいいとか、もうすっごく調べて、完璧にやってるなって思いました。」

聞き手：「もともとそういうふうな。」

A氏：「真面目ですね、あの子。」

(中略)

A氏：「多分、別のこと言ってほしかったんじゃないかなとは思いますがね。『こうだから、このほうがいいよ』みたいなね、的確な答えが、パソコン以外にお母さんとしての答えを聞きたいみたいな、じゃなかったかな。『いや、大丈夫、大丈夫。病気ちゃうから』みたいに言ってしまうと、『もういい』みたいに(なった)。」

娘は実母から妊娠期から育児期にかけて過ごし方や育児の方法を伝えられ、参考にし真似ていく。a氏は主に児が生まれてからの育児方法のことをA氏に相談していた。

A氏：「まあ、自分でこれとこれが食べたいとかっていうふうには言ってくる、メニューを指定してくるので、それは別に大したことはなかったですけど、もう実家に帰ってきてからは、生まれてからどうするかっていう話のほうが多かったの。」

聞き手：「後ろ向きというよりも前向きな話になって。」

A氏：「そうですね。買い物に行ったりとか、生まれてからどうするかとかの話のほうが多かったんで。赤ちゃんの準備ですよ。とにかくおむつを替える練習をしたいとかね。」

A氏は、自分がa氏らを育ててきた時の経験の中で、よかったと感じたことを娘にも勧めていた。

A氏：「私は3人とも母乳だったんで、粉ミルクをつくった経験がないんですよ。それに楽だったし、だから、『おっぱいが出るんだっただけで母乳のほうがいいね』って、私はそれ（母乳で子どもを育てた）だったから、それ（母乳の方がいい）は言いましたけど。」

聞き手：「aさんはそれを聞かれて…？」

A：「やってみましたよ、マッサージとか。」

(3) 娘の育児中

【自分のやってきた育児とは違った育児方法を知る】

A氏は、視覚に障がない。そんな自分には予想だにできなかった育児を娘のa氏がやっていた。そういった自分の行ってきたものとは別の育児方法の発見となっている。

A氏：「とにかく、何ていうのかな、娘は晴眼者の人たちと同じように子どもにしてあげようと思ってるので、例えば、自分たちでは写真を撮ることはまず不可能じゃないですか。そしたら、『声を残そう』って言って、生まれたときから、多分今も残してると思いますね。声で、声の写真じゃないですけど、をずっと残してますね。（中略）泣き声もあれば笑ってる声もあるし、その都度その都度で、初めて歌、歌えるようになったらとるとか、声のアルバムをつくってると。だから、『私たちには、これはできないけど、じゃ、かわりにこっちはできるよね』みたいなんで、それは夫婦でやってるので、声を残すっていうのはもう予想もつかなかったんで。」

【娘の感覚に合わせて育児方法を伝える】

新生児に慣れない初産婦は特に直接授乳に困難を感じることが多い。その直接授乳を娘に伝える際に、視覚以外の娘の感覚に合わせて授乳がうまいっているかA氏は娘に助言をしていた。

聞き手：「多分、まあ、誰でも初めての出産のときは授乳に最初悩まはると思うんですけど、aさんは？」

A氏：「大変でした。やっぱり母乳をとにかくあげたかったみたいで、だけど、ちゅっちゅちゅっちゅ吸ってる口元を確認することができないんで、『何か吸いついた感じする？』って言うと、『うん、するする、吸ってる感じがする』って言うたときに、どうしても手でこっちゃんの口元をさわって確認するんですけど、そのたんびに外れちゃったりとか。」

聞き手：「ああ、それが刺激で。」

A氏：「うん。そしたら、もうそれで、『ああ、ごめんごめんごめん』って言って、こうくわえさすまでに時間がかかるんですよ、口を持っていくのが。だけど、どうしても飲ませたいっていうのは強かったです。」

聞き手：「それでちょっと悩んではったみたいな感じですか。」

A氏：「うん。もうそれで泣いて。だから、結局どれくらい飲んでるのが確認できないので、余計つらかったみたいですよ。『お母さん、見て、飲んでる？』、『うん、口動いてるよ。飲んでるみたいよ』とは言うんだけど、もう、『どれくらい飲めたかな。どれくらい飲んだかな』とかって。量とかはすごい気にしましたね。」

【育児の主体は娘である】

初めての育児の中でa氏はできないことに直面していた。それを目の当たりにしたとしてもA氏は、サポートする側としての立場を考え育児の主体となるa氏を尊重していた。

聞き手：「沐浴とかは、お風呂の準備とか（していたか）？」

A氏：「もう生まれてからしかできないので、最初は私が入れてましたけど、一度ベビーバスでどほんと、手がつるんと、もう大泣きでしたね、娘のほうが。とにかくよく泣いてました。」

聞き手：「a さん？」

A 氏：「うん。何もできないっていうか。それで、(自分の) 悪いくせで、おむつかえてても、『こうしたほうが』って、すぐ手が出てしまうんですね。それもちょっと嫌だったかもしれない。だからもう、これもできない、あれもできない、だっこしてても泣く。もう一緒に泣いてましたわ。」

聞き手：「お母さんはどういう、黙って見て、もう……。」

A 氏：「あんまり声はそのときはかけられなくて、『どうしたん?』、『泣きやまへん』、『じゃ、一緒に泣いとき』みたいな。もう あんまり口出しも、手も出さないほうがいいと思ったんで。」

(別の場面)

A 氏：「彼女が育ててるわけで、離れてるので、生活のリズムを壊したくないので、それに、安全にかかわることだったんでね。それはもう彼女の言うとおりにしていますね、帰ってきたときは。」

【娘の母親としての成長を実感する】

里帰りから自宅に戻る時期は、産後1ヶ月など時期で決定することが多い。A 氏は、a 氏が自宅に戻る時期を a 氏自身が母親として自信をもてる時期になるまで待ち、その時を実感していた。

聞き手：「(自宅に) 帰られるときって、障がいがあるなしにかかわらず、娘とお孫さんが離れていくのって結構心配やと思うんですよ。離れていくときってどうでした？」

A 氏：「強くなってから帰ったような気がするんですね、気持ちがね。」

聞き手：「期限とかって決めてはったんですか。何月までいます……。」

A 氏：「それは決めてなかったです。だから、地震の後も、東京での生活がもう大丈夫、普通ですよってことになって、多分3月末ぐらいには帰ったと思うんですけど。」

聞き手：「最初に、ほんとうにもう帰るよってなったときは、もうぼちぼち帰ろうかなっていうのを a さんのほうから言われた？」

A 氏：「そうですね。」

聞き手：「お母様はそれを、言ってこられるのを待ってたみたいな感じで。」

A 氏：「そうですね。『いつまでおるの?』なんて、とてもじゃないけど聞けません。」

聞き手：「やっぱり見えて、ああ、もう大丈夫かなとか。」

A 氏：「そうですね。(もう大丈夫だと) 思いましたね。」

聞き手：「そういうのは、具体的にはどういうところから。」

A 氏：「やっぱり粉ミルク、まず完璧につくれるようになる。それと、お風呂も入れられるようになる。で、おむつがえも、『ああ、まだうんち残ってるよ』って思っても、『まあ、いい』みたいな。それで徐々に徐々にできるようになる。やっぱり、ぱっと見て、抱き方ももう安定してきたみたい。何よりも、やっぱり彼女、娘自身が、もう帰りたいみたいな雰囲気がやっぱり出てきましたね。そのときに、ああ、大丈夫かなみたい。」

【妊娠前の娘と変わらない】

A 氏は娘が初めての育児に奮闘する場面を見て、奮闘してはいるが無理をしているわけではない、その姿はいつも(今まで)と変わらないと静観していた。

聞き手：「(無理して)ではなく、もう自分の中でできる限りの(ことを娘は子どもにしていた)。」

A 氏：「そうですね。だって、無理して頑張ってるとは思ってないですから、彼女がね、娘が。」

聞き手：「a さん自身が？」

A 氏：「うん。だから、子どものためにこれは頑張らなきゃみたい、無理して無理してやってるわけじゃなくて、それが自然だと思いますね。」

聞き手：「お母さんから見ても、すごいもう無理して、もうそれ以上やめなさいとかっていうことは。」

A氏：「それはないですね。」

聞き手：「なるほど。じゃ、今までのaさんと変わらない？」

A氏：「変わらないですね。」

2) B氏の結果

(1) 娘の妊娠が分かった時

【娘の妊娠に複雑な思いになる】

B氏は、b氏のことを「普通の娘ではない」と語っていた。B氏にとってもb氏にとっても「待望の赤ちゃん」を授かり、娘の妊娠を喜んでいた。一方で、B氏は複雑な気持ちにもなっていた。

聞き手：「(妊娠が) わかったとき、どういうふう^に報告されたとか。」

B氏：「私のことをマミーっていうんですけど、『マミーの待望の赤ちゃんできたよ』っていう感じかな。『お待たせしました』みたいな。」

聞き手：「そしたら、もうお母様のほうが早く孫が見たいみたいな感じだったんですか。」

B氏：「いや、そうでもないんですけど、複雑な気持ち、やっぱり。普通の娘じゃないから、それは複雑な気持ちで。」

聞き手：「聞かれたときは、正直どのようなお気持ちになりました？」

B氏：「だから、うれしい半面、大丈夫かなっていう恐怖っていう、不安だね。」

【サポーターとしての覚悟を持つ】

b氏の夫は遺伝性の眼の疾患をもっていた。B氏は、出生時から目に障がいのある娘を育て、入院や手術など苦勞をしてきた経験から、生まれてくる孫に障がいがあった場合を想定し大変になるであろうと考えていた。一方で、B氏もb氏も子どもに障がいがあったとしても授かった命を中絶することはしないという同じ意見であり、サポートをしていく立場のB氏は、覚悟を確かにしていた。

B氏：「うん。(b氏の夫は) 目のがんなんですよ、両方、両目。」

聞き手：「そうなんですか。そちらのほうがあったから、そういう遺伝相談のところに行かれたということ？」

B氏：「そうですね。結局は遺伝するだろうと思って。複雑な気持ちですよ。そういう羊水検査で遺伝してるのわかってれば中絶するって方法も今の時代、何だってあるしみたいの^は言うんだけど、でも、実際おなかに赤ちゃんできちゃったら中絶なんかはしないだろうなどは、娘も私も同じ意見でしたけれど。」

(中略)

聞き手：「そうすると、最初は複雑なお気持ちだったところが。」

B氏：「まあ、もう聞き直りですよ。もう生まれたら、私も娘、ものすごい苦勞したんで、もうしょっちゅう入院だったし、緊急入院もあったし、緊急手術もすごいいっぱいあったんで、そういう、もし障がいを持って生まれちゃったら、これからが大変だっていう覚悟。」

(中略)

聞き手：「bさんの旦那さんは、障がい^が子どもにどうこうっていうような不安を、今、育てながら言われたりとかっていうのはありますか。」

B氏：「いや、私の前では何にも言ってないと思います。こうなったらしようがないもんね。私もそんな、言ってもしようがないから、とにかくこの子たちを守るしかないかな。もし病氣発覚したら早期発見してあげるしかないかなぐらいで。だってね、遺伝が怖かったら結婚しなきゃいいし、どうしても結婚したいんだったら、子どもつくれない全盲夫婦もやっぱりいるみたいだし、遺伝性あるのに遺伝しないで、3人子ども、目は何ともないよって、誰々ちゃんの子どもたちは何ともないよなんて話も聞くし、でも、それって隔世遺伝だよ、その子たちの子どもに行っちゃうかななんてっていうのもなきにしもあらずですけどね。」

(2) 娘の妊娠経過中から出産まで

【自身の経験を娘に伝える】

B氏は自分の出産時の大変だった経験を娘のb氏に伝えていた。

聞き手：「ご自身の出産体験とか（話されましたか？）。」

B氏：「しょっちゅう言っていました。『bが生まれるとき、大変だよ。十何時間のたうち回って』って。私、激痛から始まって、十何時間のたうち回ったんですよ。カーテン越しに次から次へと産んで病室に戻ってくる、声は聞こえるんだけど、私なんか全然生まれなくてっていう難儀をした話をさんざんしゃべって。わりと（娘は）安産型なんで、『あなたは幸せだね』とか言いながら。」

【孫への遺伝の心配を娘夫婦と話し合う】

B氏は、遺伝性の目の疾患をもっている娘の夫からの孫への遺伝を心配していた。しかし、それはb氏やその夫にもオープンに思いを話し合っていた。

聞き手：「生まれて対面されたときとかは、どのようなお気持ちに？」

B氏：「bの場合は、目がもう混濁してて生まれてきちゃったから、もう取り上げた助産師さんでも何でも、先生でもびっくり仰天してってということから始まったんですけど、孫は別に、後でそういう病気が発覚するかどうかは、それは置いて、生まれてすぐには別に混濁してる様子も何もなかったんで、bの病気は遺伝はしてないんだなって感じで。だから、残りは、恐怖はbの夫の病気。『目、何ともないといいね』なんて言いながら。でも、しょっちゅう、だっこしながらも、じーっと見ながらも、『目は大丈夫かな。目は大丈夫かななんて、こうじーっと見ちゃいますね、目はね。』

聞き手：「先ほど、『病気になってなかったらいいね』でしたっけ。『遺伝しなかったらいいね』って言われたっておっしゃられたのは、お産直後にそういうやりとりを娘さんとされたということですか？」

B氏：「しょっちゅう言ってることだから、妊娠中もしゃべってたし、お産の前後もしゃべってたんじゃない？。」

(3) 娘の育児中

【娘の障がいの前に、医療者に従うしかない】

B氏は、娘との関わりだけでなく、娘が出産した際に産院との医療者との関わりの中で、娘のb氏が育児をスムーズにできないかもしれないという可能性の前に医療者に従うしかなかった。

B氏：「産院はうるさかったですね。で、もう個室。『何かあったら困るから、お母さん、ずっと付き添いでいてください』みたいな。」

聞き手：「実際に、じゃ、言われて行った。」

B氏：「手とり足とり、そういえばいろいろ指導とか、結構うるさかったような気がしますね。2人目を産んだ病院は、わりとどんと任せてっていうタイプの病院で、わりと娘も自由がきいてよかったっていう感じで。」

聞き手：「そうですね。よかったですね。産院のほうには、お母さんは、『来てください』って言われたときは、一緒に行って話を聞くみたいな。」

B氏：「そうそうそう。いろいろ何か、あれをやってください、これをやってくださいみたいな、いろいろ言われたような気がするな。」

聞き手：「言われて、『何でそんな必要があるのか』と思うとか、『それは何で？』とかいろいろ。」

B氏：「私は一番最初の孫だったし、私もbがどんだけできるかもわからないし、不安もあったし、だから、個室のほうがいいのかななんて、ほかの妊婦さんとか赤ちゃんにぶつかって迷惑かけてもあれだしなんていうのもあって、反抗はできないですよ。『ええー』みたいな、『大丈夫よ、うちの子は』とは言えないから、『はいはい』って従うしかないかなとか思って。」

【現代の育児方法を受け入れる】

B氏は、自身が行ってきた育児の方法とは違う現代の育児方法に関しての意見も持ってはいるが、自分の意見を押し付けずすなりと受け入れていた。

聞き手：「お母様が育児されてたころの育児の常識的なものと今ってちょっと変わってるじゃないですか。」

B氏：「変わってるみたいですね。」

聞き手：「そういったのって、『自分のときはこうだったから、こうしたほうがいいよ』とかいうのは。」

B氏：「とは言わない。『ええ、bのいとこちゃんのときはこうだったんだけど』、『はいはい』みたいな。『今はこうだから』、『あっそ』みたいな。」

聞き手：「『もう今はこうだよ』って言われると、自分のときはこうで、自分のときの当たり前が……。」

B氏：「まあ、言うけど、『bのいとこちゃんのときは……』、例えば、今は保湿なんですよ、気が狂ったみたいに保湿保湿保湿。昔はパウダーか何かでばんばんばんとかって乾燥させる。今の時代は乾燥させると皮膚によくないからって、『今は保湿』、『はいはいはい』みたいな。だから、最初は姪っこの赤ちゃんをあれてたんだが、夏生まれなんですよ、姪っこの赤ちゃんは。夏生まれで保湿、うわー、うっとうしいなと思いつつ、『おばちゃん、今の時代は保湿だから』、『はいはい』みたいな。」

聞き手：「そう言われたら、そのとおりに。」

B氏：「だから、そのときは驚いて、『ええ、あせも予防のああいうの塗ったり、ばんばんってするんじゃないの?』って、最初はびっくりして言ったんだけど、『おばちゃん、今の時代、違うから。保湿だから』、『はあー』みたいな。(中略)『今はそういうあれなんだって』とかかって言うんだったら、『あ、そう』みたいな。だから、だんだん2人目にもなると私も余裕で、あんまり口出し手出ししないで見るぐらいかな、理想は。」

【自分の方が育児に躍起になる】

実母自身の性格で、視覚に障がいのある娘夫婦に育児をやってもらおうとは思っているが、黙って見ていられなく手を出してしまっていた。それを娘はいつものことであると楽観視していた。

聞き手：「上のお子さん妊娠されたときは、(娘が)自分が育てるといよりは。」

B氏：「いや、私が躍起になってましたね。すごいもう、かっかっかっか、かっかっかっかヒートアップしちゃって、あの子たちも、例えばうんちした後のお尻拭きだとか沐浴だとかをさせたいのに、『だめよ。ちょっとどいて』みたいな、『ちょっとどいてよ。私がやるから』みたいな。今は余裕持ってあれですけど、あの子たちも少しはなれてきたせいか、最初の子は私も、かっかっかっか、かっかっかっかしながら、もうへとへとでした。」

聞き手：「それはもう妊娠中から、やらないとっていう、あったわけではないんですか。」

B氏：「いやいやいやいや。別に、それは私の貧乏性のあれで、見ちゃったら、『どいて。ちょっと、そんな手つきじゃだめよ』みたいな。」

聞き手：「そのとき、娘さんはどのような反応をされましたか。」

B氏：「もうお気楽よ、そんな、娘は。旦那さんはうろたえてるんでしょうけど、私がいつもかっかしたもんで、『ちょっと、その手、だめ』みたいな、つい言っちゃって、私のけちゃうもんだから、うろたえてんだらうけど、娘なんか、『やってもらえるのはやってもらっちゃう』みたいな、もう至ってのんき。今だってそうだから。」

Ⅳ. 考察

先行研究においては、視覚に障がいのある妊産婦は実母と関わることで、<妊娠を喜ばれた>、<出産を喜ばれた>、<直接的サポートを受けた>、<今までの距離感が変わらなかった>、<私に合わせた工夫をしてもらった>、<あてにしていなかった>、<意見を押し付けられなかった>、<障がいがあることで「できない」と決めつけられた>という体験をしていることが明らかになっている(平田他、2017)。本研究は、それを発展させて、視覚に障

がいのある妊産婦の実母（両者ともに非障がい者）へのインタビュー調査によって、視覚に障がいのある女性が妊娠期から育児期にあった際の実母がどのような体験をし、娘との関係がどのような経過を辿っているのかを明らかにした。

娘の妊娠が分かった時、A氏、B氏にも共通して、【娘の妊娠に複雑な思いになる】体験をしていた。そして、さらに両者ともに妊娠したことは嬉しいがという前置きも共通してある。この前置きの思いは妊娠を祝福する思いであり、先行研究（平田他、2017）の実母から＜妊娠を喜ばれた＞という娘の体験と関連していると言える。しかし、実母は単純に嬉しい気持ちになったわけではなく、嬉しい気持ちの裏では、【娘の妊娠に複雑な思いになる】っていた。それは、娘夫婦が子どもを望んでおり親として祝福する思いと、障がいをもつ娘が子育てをできるのかという思いの間での複雑な思いであった。また、A氏は【娘が育児をできるか不安を感じ（る）】ていた。この不安も、【娘の妊娠に複雑な思いになる】った原因と同じであり、視覚に障がいのある娘がどうやって子育てをしていくのか、自分もどうやって教えていったらいいかわからないという不安であった。それ以前もそのように娘のことを捉えていたのかどうかは把握しきれない。しかし、「やっぱり自分の生活だけでも不便なことって多いわけですから、自分がしんどい思いするのは多分苦にならないと思うけど、今度は相手がいることなんで、どうやってやっていくのかって、私のほうが不安で」というA氏の語りからは、子どものケアをするという新しい事象が起こることが想定できる娘の妊娠が分かった時は、子どものケアをすることを娘はできないのではないかと、つまり娘に障がいがあることによりできないのではということを感じる機会（初めてか、再来かはわからないが）となっていることは否めない。

また、B氏は、娘の妊娠が分かった時に【サポーターとしての覚悟を持（つ）】っていた。「（娘の夫の障がいが遺伝するかもしれないことを）言ってもしょうがないから、とにかくこの子たちを守るしかないかな」というB氏の語りからは、自分が娘夫婦と孫を守る覚悟をしていたことが分かる。遺伝に関しての心配は、妊娠が分かった時の懸念だけでなくその後の妊娠中においても継続していることが【孫への遺伝の心配を娘夫婦と話し合う】体験でも表れている。障がい児を産んだ母親に関して土屋（2002）は「母親は、子どもの障害の理由を自らの身体に帰されることにより、『健常でない子供を産んだ』という罪悪感を抱き、その世話役割を当然のものとして引き受けていくのである」（p. 166）と述べており、A氏もB氏も少なからず罪悪感を感じ、世話役割を担ってきたということは想像に難くない。しかしB氏が娘のサポートをすることを「覚悟」をしなければならぬほど身構えていたり、遺伝の心配を娘夫婦と話し合っていたのは、娘の母親役割を自分の祖母役割の中に一体化させている、または無意識下のうちに一体化させられていると言えるのではないかと。そしてそれは、特にB氏が、娘の幼少期に娘の眼疾患の治療のために病院通いや手術など苦勞し、背負ってきた経験が影響していると考えられる。

出産や育児経験は、実母から娘に伝えられる。出産体験の実母からの伝承は、妊婦の自律性の育成を培い、母性意識の発達を促し、主体的な親になる準備を支えている（実積他、2008）。A氏、B氏にも共通して見られたのは、【実母としての意見・経験を求められ（る）】たり【自身の経験を娘に伝え（る）】たりと実母の経験を娘の妊娠中に伝えていることであった。これらから、視覚に障がいのある妊産婦の実母は、インターネットなどからの情報ではなく生の経験者として頼りされ、娘にとっては母親になる上で大きな影響力を与えられていることが推測できる。この際に娘が実母に求め実母から伝えられたのは、出産の体験談もあったが妊娠中の食事内容や児の栄養法（母乳か人工乳か）の是非など選択の助言であった。

出産後、育児中に至っては、A氏は、直接授乳の際に乳頭を吸われている感覚といった娘と共感できる感覚を用いて【娘の感覚に合わせて育児方法を伝え（る）】ていた。自分目線のやり方ではなく、娘目線で娘の感覚に歩み寄っていることが分かり、先行研究（平田他、2017）の＜私に合わせた工夫をしてもらった＞と関連していると言える。視覚に障がいのある子育て経験のある女性が執筆したとされた「視覚障害者のための子育てハンドブック」には、直接授乳やミルクを飲ませる際、おむつ交換の際の詳細な工夫が書かれている（国際視覚障害者援護協会、2009）。これは当事者ならではの経験からの工夫であるが、視覚に障がいのない実体験のない実母にとっては、自分が教える際は自分の経験を教えざるを得ない。先述したように妊娠中に娘が実母に求め実母から伝えられたのは、妊娠中の食事内容や児の栄養法（母乳か人工乳か）の是非など選択の助言であった。いよいよ育児の場においては、より具体的で実践的な助言でなければ伝わることは難しいため、娘と共感できる感覚で伝えざるを得なかった。しかし

同じ直接授乳ではあるとはいえ、娘が行うのは自分が行ってきた直接授乳の基礎編でもなく応用編でもなく、違った直接授乳であることが分かり、試行錯誤して娘とともに習得していつていることがうかがえる。また、吸っている感覚を確かめるために娘は子どもの口元に手をもっていき確認をしていた。このような行為も視覚に障がいのない実母にとっては想定外であったはずである。このような体験は、娘夫婦が写真を撮ることができないから子どもの声を録音して残していくといった【自分のやってきた育児とは違った育児方法を知る】からも読み取れる。これは、非障がい者では思い付かない障がいがあるからこそ発想できる、視覚に障がいがあるからこそできる育児であると言え、娘のやり方を尊重するという方向へも向き、【育児の主体は娘である】り、【現代の育児方法を受け入れる】体験にもつながると思われた。これは、先行研究（平田他、2017）の＜意見を押し付けられなかった＞と関連している。

しかし、B氏の【自分の方が育児に躍起になる】という点からは子育ての主体は娘ではなく実母にあるように感じられる。一般的に、障がいがあることで、できないと捉えられ、そのことで排除されることは差別となる。この場合もそのようなことが起こっているのであろうか。今回は、子どもが存在するため簡単には説明できない。なぜならば、子ども（孫）が、視覚に障がいのある娘よりも一人で生きる困難さという面では重度な状態であるとも言え、全面的介助を必要とする（時限あり）ため、実母の対応は孫を心配し、善意からくる配慮の結果であると考えられるからである。特にB氏は、娘を育ててきた際の病院通いの苦労や孫への眼疾患の遺伝の懸念をもっていただことも影響しこの体験に至っていることも考えられたが、捉え方によっては、先行研究（平田他、2017）の＜障がいがあることで「できない」と決めつけられた＞体験を娘はすることになりかねない。障がいの有無に関わらず、初めての育児は多少の不安を伴うものであり、障がいがあるためにできないと感じさせられることがあれば、母親になる重要な時期に自尊心を低下させることになってしまう。

母娘関係は、依存的過ぎても支配的過ぎても、放任過ぎても上手くはいかない。実母から娘への伝承と、母として歩む娘の主体性を尊重していくことが娘の母親役割取得の促進作用となる。それは娘自身が心理面でも安定していることも重要であるが、娘とのやり取りを振り返る中で、最終的にA氏は娘のことを【妊娠前の娘と変わらない】と感じる体験に至っている。これは先行研究（平田他、2017）の＜今までの距離感は変わらなかった＞ことに近く、普通の娘でいられる環境におかれることができていたと推測できる。その結果、A氏の【娘の母親としての成長を実感する】体験は、娘が母になる過程を順調に達成している表れである。これは、先行研究（平田他、2017）の中には関連していると思われるものはなかった。しかし、この体験は、おそらく娘も同じように感じているであろうと思ってもいる実母の内的な体験であり、何かしらの態度や声掛けがなければ娘は把握しようもないことでもあると考えられるが、実母がこのように実感していることを娘が体験することができたならば、さらなる娘の母親としての自信につながるはずである。

今回のインタビューでは、娘とのやり取りが中心に語られたが、B氏は産院とのやり取りの中で【娘の障がいを前に、医療者に従うしかない】体験をしていた。これは娘をできない人として医療者が捉え、入院中から実母のサポートを依頼しているものである。視覚に障がいのある育児中の女性の手記には、「もろもろの質問すべてが付き添ってきた母に対してなげかけられる」、「子ども扱いされていることが、悔しかった」、「章ちゃんが子どもを産むと、章ちゃんのお母さんがたいへん、みたいなことを言われると、とにかく腹が立つ」（安田、2002、p.19、p.20、p.21）と医療者との関わりの中で自身が子ども扱いされていることに怒っており同様の事態が娘自身に起こっている。B氏自身も娘がどこまでできるか分からないという不安を抱えている上に医療者のこのような対応は、実母の不安に拍車をかけることにもなりかねないと考えられた。

本研究においては、背景の違うA氏とB氏が視覚に障がいのある娘の妊娠期から育児期にかけてどのような体験をし、娘との関係がどのような経過を辿っているのかを検討した。その結果、視覚に障がいのある妊産婦の実母は、娘の妊娠が分かった時に【娘の妊娠に複雑な思いにな（る）】っていた。それは、娘に障がいがあることで子ども（孫）の世話をできないのではないかという懸念であったが、娘の妊娠を祝福する思いが前提としてあることが複雑な思いにさせていた。また、妊娠中には子どもへの栄養方法の選択についてなど実母の経験を求められ伝えていた。育児期においては、実母が娘の心身の安楽を考え、娘（夫婦）の育児を見守り、自身の育児能力を見極め娘に必要なサポートを判断するという支援姿勢をもっている（井関他、2013）という先行研究（あえて明言はしていないが、

娘は非障が者であると推測する)と同義であると思われ、母親としてのサポートの姿勢は娘の障がいの有無では変わらないのではないかと考えられた。しかし、実際に育児の場においては、直接授乳のやり方など実母の習得してきたやり方では娘に伝えることはできず、自身のやり方を伝えるのではなく【娘の感覚に合わせて育児方法を伝える(る)】、試行錯誤して育児技術の習得をサポートし、【自分のやってきた育児とは違った育児方法を知る】機会となっていた。最終的には【妊娠前の娘と変わらない】【娘の母親としての成長を実感する】という体験に至っていることが分かった。

V. 結論

視覚に障がいのある妊産婦の非視覚障がい者の実母は、娘の妊娠が分かった時に【娘の妊娠に複雑な思いになる】っていた。それは、娘に障がいがあることで子ども(孫)の世話をできないのではないかという懸念であったが、娘の妊娠を祝福する思いが前提としてあることが複雑な思いにさせていた。また、妊娠中に子どもへの栄養方法の選択についてなど実母の経験を求められ伝えており伝承がされていたが、実際に育児の場においては、自分の習得してきたやり方を伝えるのではなく【娘の感覚に合わせて育児方法を伝える(る)】、試行錯誤して育児技術の習得をサポートし、【自分のやってきた育児とは違った育児方法を知る】機会となっていた。最終的には【妊娠前の娘と変わらない】【娘の母親としての成長を実感する】という体験に至っていた。

本研究で得られた結果は、視覚に障がいのある妊産婦と実母の関係性だけにとどまらず、より普遍的に、非障がい者が障がいのある人に何かの技術を伝えたり教育する際は、非障がい者とは違う障がいのある人自身のやり方があることを心得、その人の感覚に合わせることの重要性を示唆するものとしての意義がある。

本研究は、平成27年度神戸市看護大学一般共同研究助成を得て行った。

謝辞

本研究の計画、実施におきましてご助言ご協力くださいました神戸市看護大学高田昌代教授、藤井ひろみ准教授、嶋澤恭子准教授、県立広島大学宮下ルリ子准教授、神戸市看護大学奥山葉子助教、元神戸市看護大学有本梨花助教、蒲池あずさ助教に感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 福田美佐子, 矢島悟子, 渡辺利子, 綱川芳子, 鯉淵タツノ (1994). 視覚障害のある初産婦への母乳栄養推進に向けた育児指導を行って, 日本看護学会集録 母性看護, 25, 153-155.
- 半田美友紀 (1999). 障害児の受容を困難とした母親への精神的援助 - フィンクの危機モデルによる心理分析を試みて -, 日本看護学会論文集 小児看護, 30, 91-93.
- 平田恭子, 奥山葉子, 嶋澤恭子, 藤井ひろみ, 高田昌代, 宮下ルリ子他 (2017). 視覚に障がいのある妊産婦の体験 - 実母との関わりに焦点を当てて -, 兵庫県母性衛生学会誌, 26, 24-28.
- 一瀬早百合 (2005). 障害児をもつ母親の早期における苦悩の構造とその変容 - グループワークを通じた自己イメージの変容と人間関係構築との関連 -, 35-42.
- 井関敦子, 南田智子, 大橋一友 (2013). 里帰り分娩を行った娘に対する実母の支援姿勢と支援を通じて体験した思い, 母性衛生, 54 (1), 191-199.
- 実積麻美, 大谷愛佳, 山崎愛沙, 山下恵, 和田亜弓, 谷脇文子 (2008). 実母からの出産体験の伝承に対する妊婦の意味づけ, 母性衛生, 48 (4), 542-549.
- 梶正義 (2017). 発達障害のある子どもの新生児期における発達上の問題と母親の子育て困難感: 発達障害児定型発達児の比較, 関西国際大学研究紀要, 18, 1-7.
- 小池伸一, 村井弘育, 幸福秀和 (2004). 障害をもつ子どもの母親における障害受容要因 - 二重 ABCX モデルを援助して -, 吉備国際大学保健科学部紀要, 9, 127-138.

- 国際視覚障害者援護協会 (2009). 視覚障害者のための子育てハンドブック - かけがえのないあなたと歩む -, 東京: 建城企画.
- 松岡治子, 竹内一夫, 竹内政夫 (2002). 障害児をもつ母親のソーシャルサポートと抑うつとの関連について, 日本女性心身医学会雑誌, 7 (1), 46-54.
- 松岡治子 (2006). 障害児をもつ母親のソーシャルサポートと抑うつとの関連, Kitakanto Medical Journal, 247-248.
- 宮崎史子 (2002). 障害児を抱える母親の養育体験に関する研究, 小児保健研究, 61 (3), 421-427.
- 小野真由美 (1992). 視力障害を伴った初産婦の育児指導, 健生病院医報, 18, 22-27.
- 大久保麻矢 (2016). 発達障害児の母親になる過程 - 「診断」による母親と周囲の人々の変化 -, 人間文化創成科学論叢, 19, 127-134.
- 白井瑞子, 井関敦子, 久保素子, 高島明美 (2006). 母親のサポートに関する娘 (第1子育児早期) の認識と依存性の関連, 香川母性衛生学会誌, 6 (1), 29-36.
- 園川緑 (2016). 子育て支援の場における母親の気持ちの変容とそのプロセス - 特別な支援を必要とする子どもの母親の気持ちに着目して -, 帝京平成大学紀要, 27, 127-140.
- 種子田綾, 桐野匡史, 矢嶋裕樹, 中嶋和夫 (2004). 障害児の問題行動と母親のストレス認知の関係, 東京保健学会誌, 7 (2), 79-87.
- 谷川涼子, 中村由美子 (2008). 障害児をもつ家族のピリーフと障害受容の関係 (第2報) - 助成的ピリーフと拘束的ピリーフ -, 日本看護学会論文集 小児看護, 39, 260-262.
- 立道聡子 (2007). たからもの - 全盲の夫婦と赤ちゃんの愛の物語 -, p.96, 東京: 株式会社双葉社.
- 土屋葉 (2002). 障害者家族を生きる, p.116, 東京: 頸草書房.
- 安田章代 (2002). 見えなくなって見えてきた -17歳失明、23歳結婚、25歳出産 -, pp.19-21, 東京: 講談社.

How Mothers should Support the Daughters with Visual Impairment for their Pregnancy and Child-care

HIRATA Kyoko

Abstract:

Mothers play important roles for daughters for their pregnancy and child-care. When daughters have some impairments, then, how non-disabled mothers should support daughters and pass their experience of child-care? This research aims to clarify the experiences of the non-disabled mothers of women with visual impairment from their pregnancy to child-care. Semi-structured interviews were conducted with two mothers about their experience involving their daughters' pregnancy and child-care. These mothers were happy about their daughters' pregnancy but had complicated feeling about the ability of their daughters to take care of the child, or their ability of supporting the daughters. Still, they determined to be supportive. During the pregnancy, the mothers taught their experience to daughters. After the child was born, the mothers faced more trial-and-error on how to pass their child-care skills, and they tried to respect the daughter's sense rather than their own sense. Interviewed mothers recognized daughter's way of child-care as it is, which are different from their own. Eventually, mothers realized their daughter's growth as a mother. The conclusion argues that it is important for non-disabled people to adjust how to share any techniques by respecting the sense and the way of disabled people.

Keywords: visual impairment, pregnant woman, mother, pregnancy, child-care

孫が生まれる時

——視覚に障がいのある妊産婦の実母の事例——

平 田 恭 子

要旨：

視覚に障がいのある妊産婦に関わる先行研究は医療者側の視点に立ったものが主であり、当事者の体験については妊産婦から見た実母との関わりのみが明らかにされている。本稿では実母側の視点に立ち、視覚に障がいのある娘が妊娠期から育児期にあった際の実母の体験および娘との関わりを明らかにすることを目的とする。実母に対し半構造的インタビューを実施、質的に分析した結果、以下が明らかとなった。実母は、娘の妊娠を喜びながらも娘が育児をできるのか、自分も教えていけるのかと複雑な思いになりつつもサポーターとしての覚悟をしていた。また、妊娠中に子どもへの栄養方法の選択についてなど実母の経験を伝えていたが、育児の場では、自分のやり方ではなく娘の感覚に合わせて育児技術を伝え、試行錯誤してその習得をサポートし、自分とは違う育児方法があると知る機会となっていた。最終的には娘の母親としての成長を実感するという体験に至っていた。